

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：32203

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11777

研究課題名(和文) 幼老共生施設における継続的世代間交流プログラムの標準化と実践継続システム構築

研究課題名(英文) Investigate and validation of the continuous inter-generational program in nursing schools and nursing homes

研究代表者

六角 僚子 (Rokkaku, Ryoko)

獨協医科大学・看護学部・教授

研究者番号：10382813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：標準化した継続的世代間交流プログラム研修を受けたスタッフによる世代間交流実践が高齢者と児にプラスの影響を与えるということを検証する目的である。対象はA市の幼老共生施設で、平成27年6月～平成29年11月まで実施した。介入群と対象群比較はWilcoxon検定、介入前後ではフィッシャー検定を行った。介入群は職場環境と技能活用項目が有意に向上し、一方対照群では仕事に見合った給料や地位獲得項目が有意に低下した。介入前後において子供、高齢者、職員へのプラスの効果が有意に推移した。対照高齢者群では気分評価の関心項目が有意に低下した。これらの結果から、世代間交流はプラスに影響を与えるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Recently intergenerational programs between children and old persons with dementia have been frequently reported in many nursing homes of Japan. However, the effects are not clear probably due to the lack of the controlled study. An aim of the study is to standardize and investigate the effect of the continuous inter-generational program to participants with dementia and staffs. The study was conducted from June, 2015 to July, 2017 in A facility by comparing the intervened group and the controlled group. In the results, workplace environments and skill utilization significantly improved in the staffs of the intervened group and the scores of Affect Rating Scale (ARS) significantly improved in the elderly participants with dementia of the intervened group. An interest item of the ARS significantly decreased in the control elderly person group. It is suggested that the inter-generational program between children and elderly persons with dementia partly improved quality of life of them.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：世代間交流 高齢者

1. 研究開始当初の背景

厚生労働省(2013)では宅幼老所(地域共生型サービス)の推進を取り上げ、地域共生型サービスを小規模で家庭的な雰囲気の中、高齢者、障害者や子どもなどに対して、1人ひとりの生活リズムに合わせて柔軟なサービスを行う取組と定義し、その事業の理念として「誰もが地域でともに暮らす」(共生)を重視している。古いデータになるが、2000年には全国で564施設が高齢者施設と保育所を併設している(厚生労働省)。北村(2003)はこれらの幼老共生型施設では、いずれも従来は年齢によって一律に分けられてきた子どもと高齢者という存在を統合し、両世代の相互作用を重視した取組みが実践されていると報告し、一方では計画交流の重要性や交流促進と負担増のジレンマを今後の課題に挙げている。それらの環境を整えることで、施設利用者やスタッフのケアや教育という面での質的向上という直接効果とともに、「人」「場所」というヨコ軸と「時間」というタテ軸への広がりを通じて地域社会への間接効果をもたらすといえよう。最近では「都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流を促進する支援過程」として世代間交流の形成過程を質的に明らかにしている報告もある(糸井, 2008; 亀井ら, 2010)。

そこで標準化した継続的世代間交流プログラムを教育的な配慮も含みながら開発し、幼老共生型施設において、実施することが必要であると考えた。意義は以下の3点と考える。(1)先行研究結果より抽出されたプログラムを標準化した継続的世代間交流プログラムとして開発する、(2)標準化した継続的世代間交流プログラムを幼老共生型のスタッフへ伝達、継続介入を支援する、(3)実践継続システムを開発、幼老共生型施設で実践し、モデル構築をする。

2. 研究の目的

本研究は、標準化された継続的世代間交流プログラムを習得し、支援を受けたスタッフによる世代間交流実践が子ども、高齢者、スタッフへの影響を検証する目的で行った。

3. 研究の方法

(1)研究対象は介入群・対照群はA市の幼老共生型施設の高齢者及びスタッフとし、それぞれ棟を区別して実施した。

(2)研究期間：平成27年6月～29年11月

(3)調査方法：介入：標準化した継続的世代間交流プログラムを幼老共生型のスタッフへ伝達、継続介入を支援する。データ収集：調査は、以下の質問紙を用い、高齢者は、介入前(平成27年7～8月)介入終了時(平成29年10～11月)の2時点、スタッフは、介入前、介入直後(平成27年10～11月)介入終了時の3時点で行った。<高齢者>：高齢者の認知症のための障害評価票(disability assessment for dementia、以下DAD)、認知症高齢者に対する感情の評価・主観的QOLの評価(Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale、以下ARS)、認知症の行動心理症状(BPSD)<スタッフ>：世代間交流実践に関する意識調査、職業性ストレス簡易調査票(以下BJSQ)分析方法：高齢者は2時点、スタッフは3時点で、得点化し、統計的に分析した。尺度などの数値データは、Mann-Whitney U検定(ノンパラメトリック法)で分析した。カテゴリーデータは、フィッシャーの正確確率検定で分析した。

4. 研究成果

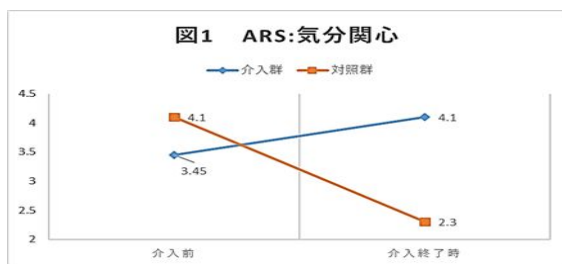
介入前から終了時までの2時点のデータが得られた高齢者を対象とし、介入高齢者群は20名、対照高齢者群は10名であった。それぞれの平均年齢は、介入群87.56歳、対照群86.47歳であり、双方とも要介護度は3～4に集中していた。

介入群のスタッフは19名、対象群のスタッフは16名であった。スタッフの平均年齢は介入群で31.8歳、対照群で30.4歳であり、

専門職月数が前者は 90.9 か月、後者は 47.5 か月であった。

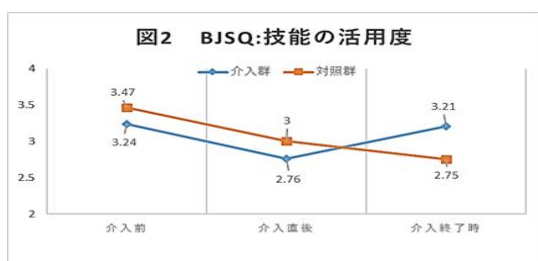
(1) 高齢者間の比較

対照群では ARS の「気分関心」項目（目で物を追う、人や物をじっと見たり追う、表情や動作での反応がある、アイコンタクトがある、音楽に身体の動きや言葉での反応がある、人や物に身体を向けたり動かす）が有意に低下した ($p < 0.01$) (図 1)。一方、介入群では有意差は認められないものの、同項目で上昇した。



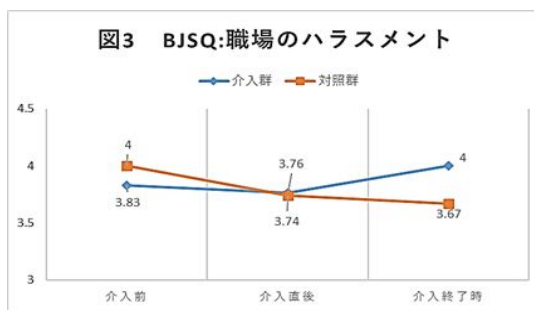
対照群では、BJSQ の自分の技能や知識活用の項目「技能の活用度」について、介入前から介入直後、介入終了時にわたり、有意に低下していた ($p < 0.01$) (図 2)。また、職場環境を問う項目「職場のハラスメント」では、対照群では有意に低下し ($p < 0.05$)、介入群では有意差はないが向上した (図 3)。さらに、対象群では自身に見合った給料や地位獲得項目「経済・地位報酬」が有意に低下した ($p < 0.05$)。

また、介入群の介入前、直後を比較したところ、世代間交流の子ども、高齢者、職員への影響について、前後に有意にプラスの影響があったことが示された ($p < 0.01$)。



(3) 考察

分析の結果、介入群の高齢者・スタッフ側に



プラスの影響があるという結果を得ることができた。

まず、世代間交流を継続的に受けていない高齢者群の認知症高齢者に対する感情の評価・主観的 QOL の評価 (ARS) において、興味関心項目値が有意に低下したが、これは目で物を追う、人や物をじっと見たり追う、表情や動作での反応がある、アイコンタクトがある、音楽に身体の動きや言葉での反応がある、人や物に身体を向けたり動かす、といった観察項目が含まれており、刺激の少ない生活の継続が項目値の低下をもたらしたと推測する。一方、継続的世代間交流を受けた高齢者群に有意差は認められないものの、緩やかに上昇している。今回は 2 年という期間であり、さらに継続することで有意に上昇する可能性が高いと予測される。

スタッフ間の比較では、BJSQ の自分の技能や知識活用項目、職場環境 (ハラスメント) 項目について、介入群と対照群が相反して有意に推移した。これは世代間交流という活動が知識・技能の活用に大きく関連し、さらには職場環境をプラスに変化させていったことが考えられる。世代間交流はスタッフ側にもプラスの影響を与えていることが明らかとなった。

また介入スタッフ群の介入前後の比較において、子ども、高齢者、同僚がプラスの影響を受けていると感じていることも明らかとなった。介入スタッフ群の主観ではあるが、それがまた職業性ストレス調査項目に影響を与えていることも推測できる。

今回これらの結果より、幼老共生型施設において標準化された継続的世代間交流プログラムの研修を受けたスタッフによる世代

間交流実践が高齢者と児にプラスの影響を
与えるということが検証できたと考える。

今後はこの世代間交流プログラムの浸透
を図り、高齢者の生活の質を向上させていき
たいと考える。

<引用・参考文献>

厚生労働省「宅幼老所の取り組み」2014

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/other/dl/other-04.pdf 2014,10,12

北村 安樹子：幼老複合施設における異世代交
流の取り組み 福祉社会における幼老共生
ケアの可能性 , LifeDesign R E P O R
T ,5-13,2003. 8

亀井 智子,糸井 和佳,梶井 文子ら：都市部
多世代交流型デイプログラム参加者の12か
月間の効果に関する縦断的検証：Mixed
methodsによる高齢者の心の健康と世代間交
流の変化に焦点を当てて,日本老年看護学
会誌 14(1), 16-24, 2010-01-15

渡辺優子：幼児と高齢者の世代間交流の現状
と問題点,新潟青陵大学短期大学部研究報告
第34号,15-25, 2004

R. Rokkaku, A. Homma, S. Kobayashi, Y.
Seki: CAN CONTINUOUS, INTER-GENERATIONAL
COOPERATION POSITIVELY IMPACT THE
QUALITY OF LIFE OF ELDERLY ALZHEIMER ' S
SUFFERERS?:Journal of Aging Research &
Clinical Practice© Volume 3, Number 3, 2014
5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担
者及び連携研究者には下線)
〔学会発表〕(計4件)

関由香里、六角僚子、種市ひろみ、林幸子、
幼老共生施設のスタッフが世代間交流の実
践過程で抱いた思い - 世代間交流にかかわ
ったスタッフへのインタビューを通して -、
第23回日本老年看護学会学術集会、2018.

岩塚俊紀、六角僚子、関由香里、種市ひろ
み、林幸子他、幼老共生施設における世代間
交流の実践を通して、感じた成果と改善点、
第19回日本認知症ケア学会、2018.

Y. Seki, S.Hayashi, T.hiromi, R.Rokkaku,
Staff feelings and challenges in managing
an on-going, inter-generational
cooperation program in an
inter-generational cooperation facility,
The 11th International Congress of Asian
Society Against Dementia(国際学会), 2017.
S.Hayashi, Y.Seki, S.Hayashi, T.hiromi,
R.Rokkaku, Staff achievements and
challenges in an elderly-children
inter-generational cooperation facility,
The 11th International Congress of Asian
Society Against Dementia(国際学会), 2017.

6. 研究組織

(1)研究代表者

六角 僚子 (Rokkaku, Ryoko)
獨協医科大学・看護学部・教授
研究者番号：10382813

(2)研究分担者

種市 ひろみ (Taneichi, Hiromi)
獨協医科大学・看護学部・准教授
研究者番号：40525143

金子 昌子 (Kaneko, Shoko)
獨協医科大学・看護学部・教授
研究者番号：70194909

関 由香里 (Seki, Yukari)
獨協医科大学・看護学部・助教
研究者番号：20613285

林 幸子 (Hahashi, Sachiko)
獨協医科大学・看護学部・講師
研究者番号：70642263

小林 小百合 (Kobayashi, Sayuri)
東京工科大学・医療保健学部・准教授
研究者番号：20238182

(削除：平成28年3月17日)

本間 昭 (Honma, Akira)
社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東
京センター・その他部局等・その他
研究者番号：40081707

(削除 : 平成 28 年 8 月 17 日)

白石 裕子 (Shiraiishi, Yuko)

東京工科大学・医療保健学部・准教授

研究者番号 : 90734856

(削除 : 平成 28 年 3 月 17 日)

高村 久子 (Takamura, Hisako)

獨協医科大学・看護学部・助教

研究者番号 : 00768062

(削除 : 平成 29 年 3 月 21 日)